

小説 上田なかの
挿絵 アルデヒド

学園百合 ストリーズ

3つの
恋花

立ち読み版



み か づ き あ お は
三日月蒼葉(左)
元気いっぱいの女の子。
雪菜とは家が隣同士。お
こづかいは服代に消える
ことも。

も も ぞ の ゆ き な
桃園雪菜(右)
クールで物静かな性格、
何を考えているのかわか
りにくいとは周囲の評判。



い わ ら ま り こ
井村茉莉子(左)
学園の美術教師。同校の卒
業生でもある。芸術家肌で、
自らの作品の制作も行う。

く が や ま い お り
久我山伊織(右)
茉莉子の教え子で、生徒会
にて書記も務める。進路に
語学留学を希望している。

登場人物紹介

Characters



なつがみ さなえ

夏神早苗

学園に今年入学してきた生徒。姉の志穂から華恋の噂を聞き、入学以来気になっている。



おくのいん かれん

奥乃院華恋

学園の生徒会長。優美な立ち振る舞いで、教師・生徒から信頼を得ている。

一話

結ばれることのない好きな人

007

二話

あたしの可愛い恋人

093

三話

大切なのは好きという気持ち

167

真っ直ぐ雪菜の瞳を見つめて問う。絶対に言い逃れはさせないというように……。
 対する雪菜は一瞬瞳を揺らがせると、観念するように「はあ……」と息を吐いた。

「蒼葉は最近私に友達や恋人を作らせようとしてる……でしょ？」

「それは……うん……うん……」

「どうやら気付いていたらしい。」

「でも、私は前から言ってるようにそういうのはいらぬ。だから迷惑。だからその……あの時は困って、どうしようかって……なって……思わず逃げ出しちゃった……」

「そう……だったんだ……」

「ああいうのは迷惑。だから……もうやめて……」

語りながら雪菜は俯く。そのせいだろうか？ なんだかいつも以上に小柄に見えた。

「……分かった。ごめん。ああいうことはもうしない」

「分かってくれればいい」

「でも、一つだけ聞かせて。どうして？ 何でそこまで人を拒絶するの？ 大勢友達がいると楽しいよ。友達……いらぬいの？ 恋人……いらぬいの？ 友達や恋人というか……好きな人がいるって素敵なことだよ」

「それは……」

人を好きになる——それは素晴らしいことだと思う。

確かに自分がしているのは叶わぬ恋だ。それでも雪菜を好きになったことを後悔はし

ていない。辛いことも多い。むしろ自分の場合辛いことばかりだ。でも、自分よりも大切な人がいるという感覚は、とても素敵なものだった。

それを雪菜にも知ってもらいたい。雪菜には幸せになってもらいたいから……。

「私だって知ってる。友達なら蒼葉がいるから……。友達がいることが素敵ってことくらい私だって……。それに……」

「それに？」

自分がいて友達の素敵さは分かっていると雪菜が言ってくれたことに堪らないほどの喜びを覚えつつ問い返す。

するとこれに対して雪菜は――

「好きな人だって……いる」

という答えを返してくれた。

「――え？」

これに一瞬頭の中が真っ白になる。

(好きな人？ 雪菜に？)

まったく考えてもいなかった返事だった。

一体誰だろうか？ そんな相手雪菜にいたか？

雪菜の交友関係を脳内で思考する。けれど、それらしい相手はいない。というよりも、雪菜と接点を持っている人間なんて家族を除けば自分くらいだった。

「そ……それ……誰？ 私の知ってる人？ 学校の誰か？ 誰？」

だから思わず問い返してしまおう。

「……別に……蒼葉には関係ない」

「う……それは……その……そうかもしれないけど……。だけど、相手がいるなら応援するよ。私……なんだってする。雪菜のためだったらなんだって!!」

雪菜を幸せにしたい。幼なじみが幸せになれるのであればそれでいい。それだけで自分も幸せになれるから……。

誰か好きな人——そのことは正直言おうと辛い。でも、その感情を押し隠して問う。

「別に応援なんかいらぬ」

けれど幼なじみは蒼葉の想いを拒絶してきた。

「どうして？ 何で？ 私じゃ頼りにならない……とか？」

「べ……別にそんなんじゃない。蒼葉は頼りになる」

「それじゃあ……どうして？」

「どうしてって……それは……」

真っ直ぐ見つめながら問うと、雪菜は困るような表情を浮かべた後——

「……応援なんかしてもらっても無理だから……」

そう口にした。

「無理？ どういうこと？」

「……叶わない……ということ……」

辛そうな表情が浮かぶ。

どこことなく悲しそうな表情だった——見ていただけでこっちまで悲しくなってくる。

雪菜のこんな顔見たくはなかった。

「どうして？ 何で叶わないなんて……そんなの相手に気持ちを伝えてみないと分からないことじゃない」

元気づけるように告げる。

「……分かる。分かっていることだから……」

しかし、雪菜は首を左右に振った。

「なんで？ どうしてそんなことが言えるのよ？ 誰？ 誰なのそれは？ そこまで絶対

無理な相手って……誰なの？」

ここまで追及する権利が自分にはないことは分かっている。それでも雪菜のことなら引くわけにはいかない。相手が誰であったとしても必ず——という決意のもとに重ねて尋ねる。

「……………」

すると雪菜はどこことなく瞳を潤ませながら、真っ直ぐこちらを見つめてきた。

「雪菜？」

凄く寂しそうな顔だった。

でも、何かを決意するような表情にも見える。

一体雪菜は何を考えて？

なんてことを考えた次の瞬間――

「んっ」

柔らかく、温かな感触を唇に感じた。

「……………っ?!」

至近――鼻息をこそばゆく感じるほどの距離にまで雪菜が顔を近づけてきていた。

唇に感じる感触。それは雪菜の唇……………。

「……………ほら……………叶わない……………」

唇を離しながら、そう言って雪菜は笑った。

「……………」

そんな幼なじみを見つめながら、蒼葉は呆然とする。

(なに？ 今……………何された？ 雪菜に……………何を？ え？ き……………キス!!)

思考が渦を巻いていた。自分が何をされたのかも分からない。もしかして夢でも見ているんじゃないか？ とさえ思ってしまう。何かの勘違いなんじゃないか――と。

そんなことを考えながら、ソツと自分の唇に指を添える。

(……………あったかい……………)

指先に温かな体温が伝わってきた。

自分の熱である。でも、どうしてだろう？ この温かさは自分のものではない。雪菜の

「ものだ——そう思う自分がいた。」

同時に心臓がドキドキと激しく脈動を始める。全身が熱く火照り始める。眺からは——

「え？ あ……蒼葉!？」

雪菜が驚くほどに、ボロボロと涙が零れ落ちた。

「その……あ……ご……ごめん……。蒼葉……その……ごめん……」

これを見た雪菜が慌て始める。

普段の冷静さからは想像もできないほどに、幼なじみは混乱しているように見えた。

そんな姿もやっぱり可愛らしい。

それになんだかおかしくて、ボロボロ泣きながら蒼葉は笑った。

「別に……謝る必要はないわよ。雪菜はなにも悪くないから……」

「いや……でも……蒼葉……泣いてる……」

「これは……その……なんていうか、悲しい涙じゃないの……」

「悲しい涙じゃない？」

「そう……。うん。悲しくない。辛くもない。むしろ……おかしい……」

クスクスと笑う。

「おかしい？ 何が？」

「なんていうか……自分の……そう……馬鹿さ加減が」

そうだ。自分は馬鹿だった。本当に馬鹿だった。

勝手に諦めて、勝手に自分で結論を出して、雪菜を傷つけた。本当に馬鹿だと思う。

「諦める勇氣よりも前に出る勇氣の方がずっとずっと必要だったんだ。私……それがよく分かった」

「諦めるより前に出る？ 私は……蒼葉が何を言ってるのかよく分からない」

「ああ……ごめんごめん。その……えっと……こういうことだよ」

そう語りながら涙を拭うと――

「んっちゅ」

今度は蒼葉からキスをした。雪菜の唇に自分の唇を重ねた。

「んんっ!？」

幼なじみの瞳が驚きに見開かれる。

でも、唇は離さない。雪菜が見せる反応に愛おしさすら感じながら、ずっとずっと唇を

重ね続けた。

「んっふ……んんん……」

そのお陰だろうか？ やがて雪菜は表情から驚きを消すと、こちらのキスを受け入れるように瞳を閉じてくれた。

そのまま互いの身体をギュッと強く抱き締める。互いの身体の温かさを確かめ合うかのよう……。

しばらくキスを続けた後――

「私……雪菜のことが好きよ。ずっとずっと……昔から……」

そうはつきり自分の想いを告げた。

「……嘘……」

呆然と雪菜は呟く。

「嘘じゃない。嘘じゃないよ……」

そう語りかけながら、もう一度雪菜の唇に自分の唇を重ねた。

いや、一回だけじゃ終わらない。

「んっちゅ……むちゅっ……ふちゅううっ」

「んふっ……ふっちゅ……ちゅっちゅっちゅっ……んちゅうう……」

何度も何度も、啄むようにキスを続けた。

「私の気持ち……分かってくれた？」

唇が唾液で濡れるほどキスを繰り返した後、雪菜に問う。

「……うん……確かに……馬鹿みたい……。私達二人とも……」

呆然とした様子で雪菜は呟く。

「好きだった……でも、結ばれることなんかはないと思ってた。だから、ずっとずっと想いは隠し続けるつもりだった。蒼葉と一緒にいらればそれでいいって……。だから、友達とかも作らなかつた」

「……そうだったんだ」

初めて雪菜が友達や恋人を作らなかつた理由を知る。

「でも……それは本当に馬鹿な考えだったんだ……」

雪菜はそう言つて笑つた。

その姿に、自然と蒼葉も笑みを浮かべる。

「でしょ？」

二人揃つて笑い合つた。

「んちゅっ……んっんっ……ふちゅっ……んちゅううっ」

その上で、どちらからともなくまたキスをする。

まだまだ足りない。これまでずっと我慢してきた分を取り戻したい——とでもいうような口付けだった。

(雪菜の唇……柔らかくて……温かくて……凄く……気持ちがいい……)

唇と唇を重ねているだけでしかないというのに、身体が蕩けてしまうんじゃないか？と思うほどの愉悦を感じる。唇を中心に二人の身体が溶け、混ざり合い、一つに交わり合つていくような感覚さえした。

(でも……これだけじゃ足りない……。もつと……もつと深く繋がりたい。もつと雪菜と……もつと……もつともつともつと……)

想いが膨れ上がる。気持ちを伝え合つただけじゃ足りないと思つてしまう。もつと雪菜を知りたい。心だけでなく、身体まで雪菜と繋がりたい——そう思つてしまう。



「そっか……」

その姿にホツとする。ホツとしつつ愛おしさを覚える。

本当に伊織は自分を好きでいてくれるのだ。それが嬉しい。だからこそ傷つけるわけにはいかない……。

「久我山……いや、伊織……」

そんな想いを抱えつつ生徒の下の名を呼ぶと共に、もう一度茉莉子はキスをした。

それも、ただのキスじゃない。

「んっちゅ……くちゅうっ」

舌を挿し込む。この可愛い唇をすべて自分のものになりたい——とでもいうように、口腔に……。

「ふっむ……んんんっ!!」

最初にキスをした時のように、伊織は驚くような様子を見せる。瞳を見開き、身体を硬く硬直させた。

ただ、今回の驚きは一瞬でしかない。

「ふむっ……くちゅるっ……んっちゅ……ちゅぶうっ……んっんっ……くちゅうっ……」

すぐに伊織は全身から力を抜くと、見開いていた瞳を閉じた。それと共にこちらが挿し込んだ舌に自分からも舌を絡み付かせてくる。茉莉子のすべてを受け入れる——とでもいうように……。

くっちゅ……ぬちゅっ……。ぐちゅるっ……。ちゅっちゅっ……。くちゅうう……。

美術室中に淫靡な、それでいてどこか美しい響きのする音色が響いた。

互いの口腔を貪り合うようなキス——舌を蠢かせるたびに、全身が熱く火照っていくのを感じた。発熱でもしているみたいに身体中が熱くなっていく。ジュンツと下半身が疼きだすのが分かった。

(これ以上はまずいな……)

これ以上口付けを続けたら止まれなくなってしまう。さすがにそれはまずい。

自分からキスをしたとはいえ、自分は教師であり伊織は生徒なのだ。キスしたのは自分から。でも、これ以上は……。不適切な関係になるわけには……。

理性がブレーキをかける。

「んっふ……ふちゅうう……んふふ」

それに逆らうことなく、そつと唇を離れた。

ツプツと口唇と口唇の間に唾液の糸が伸びる。

「その……それじゃあ……作業を再開しようか……」

キャンバスの前に戻らないと……。

「待って……先生……」

しかし、そんな茉莉子の服の裾をキュツと伊織が握ってきた。

「どうした……伊織？」

生徒の顔は真っ赤に染まっている。先程涙を流した時よりも、瞳は潤んでいるように見えた。半開きになった口からは「はあはあはあ」と荒い息が漏れている。

正直なことを言うと、この表情だけで彼女が何を求めているのか理解できた。何故ならば、茉莉子自身も同じことを考えていたから……。

それでも敢えて尋ねた茉莉子に対し教え子は――

「……もつと……して下さい先生……」

予想通りの言葉を口にしてきた。

「それは……駄目。あたしは教師で伊織は生徒だから……。だからそういうことは我慢しない……」

伊織に――いや、自分自身に言い聞かせるようにそう呟く。

けれど生徒は首を横に振った。その上で立ち上がると、ギュッと茉莉子の身体を強く抱き締めてきた。

「無理です。我慢なんかできません……」

耳元で囁かれる。

吐息混じりの声だ。聞いているだけでなんだかゾクゾクしてしまう。

「だ……駄目……。離して……伊織……」

こんな声を聞かされたら、こんなに柔らかで温かい肢体の感触を押しつけられたら、我慢できなくなってしまう。

だからなんとか伊織から逃れようと茉莉子は身を振まつただけけれど、どうしてだろう？
身体に力が入らない。そのせいで抱擁を振り解けない。

「お願い……先生。わたしを先生のものにして下さい。わたしの全部を先生のものに……」
「で……でもな……」

「好きなんです先生が……茉莉子さんが……大好きなの。だから……お願いです」
名前を呼ばれた。先生ではなく茉莉子という名を……。

好きという言葉に胸が高鳴る。昂つてた肉体が、更に興奮していくのを感じた。
抱きたい。本能の赴くままに押し倒したい——なんてことを考えてしまう。

「伊織……本当にいいのか？」
気がつけばそんな言葉を口にしてしまっていた。

「はい」
これに対して頷くと同時に——

「んっちゅう」
今度は伊織の方からキスをしてきた。

もちろんただのキスじゃない。しっかりと舌まで挿し込んでくる。
（ああ……もう駄目だ……）

ここまでされて我慢なんかできない。できるはずがなかった。

「い……伊織っ……」

どうしようもないほどに本能が膨れ上がっていく。

そんなものに流されるがままに、茉莉子はクチュクチュとキスを続けつつ生徒の——恋人の身体をそつと床に寝かせた。

その上で空いた手を蠢かし、控えめな乳房に添える。膨らんだ柔肉。それを掌で包み込み、揉んだ。

「んあっ」

少し揉んだだけで、ピクンツと伊織の肉体はまるで電流でも流されたみたいに震える。開いた口から漏れた声の中には間違ひなく甘い響きが含まれていた。まだ一揉みしただけでしかないというのにこの反応。どうやらかなり敏感らしい。

なんだか嬉しくなってくる。もつと感じさせたい。もつと気持ちよくしてやりたい。自然とそう思った。

そんな想いの赴くままに、更に乳房を揉む。チュツチュツチュツと口唇にキスを続けながら、繰り返し乳房を揉みしだいた。

「はっふ……んふううう！ あっあっあっ」
愛撫に合わせて伊織は悶える。

「どうだ？ 気持ちいいか？」

「は……い……んっふ……。あああ……。き、気持ちいい。先生……。わたし……。んんん！ はふ……。くふうう……。はあ……。はあ……。はあ……。はあ……。凄く……。感じます」

快楽を素直に認めてくれた。

それどころか、

「そうか……でも、この程度じゃないぞ。もつと……もつと気持ちよくしてやるからな」
などという言葉を、

「はい……して下さい……。お願いします。わたしを……もつと……茉莉子さんの手で……もつと気持ちよくして下さい……」

素直に受け入れてくれる。

それが嬉しい。

「分かった……。最高の快楽を刻んでやるからな」

この言葉通り、更なる愛撫を伊織の肉体に与えていく。

ただ乳房を揉むだけじゃない。唇にしていたように、伊織の全身に口付けの雨を降らせていく。

「んっちゅ……くちゅうっ……。ちゅっちゅっちゅ……むちゅううっ」

首筋に口唇を押し当て、鎖骨を舐めた。肩から二の腕を唇でなぞり、乳首にもチュッチュツチュツと口付けする。もちろんキスだけではなく口を開くと躊躇なく乳頭を咥え、チュウウツと吸引したりもした。

「あんん！ それ……いい……いい……。おっぱい。わたし……気持ちいい……。あっあつ……茉莉子さんにおっぱい吸われるの……凄く……あんっ！ す……ごく……いい、いいで

す……」

「そっか……。でも、まだまだ……本番はこれからだぞ」

「本番？ な……なにを？」

すぐに分かるさ——と、全身を紅潮させながら、小首を傾げてくる伊織に笑いかけると共に、乳首から腰に向かってツツツツと舌を蠢かせていった。

「はふっ！ あっ！ んひんっ」

舌先で柔らかな肌をなぞっていく。伊織は想像以上に敏感であり、少し舌を動かしただけで過敏なまでに肢体を幾度も震わせた。その動きに比例するように分泌される愛液量も増えていく。舌先に少し塩気を含んだ味が伝わってくる。それを堪能しつつ、少女のような秘部にまで口唇を移動させた。

「え？ あ……ま……まさか……。それは……駄目です茉莉子さん……。そこ汚い……汚いところですから……」

さすがに茉莉子が何をしようとしているのか伊織も気がつく。慌てた様子で制止の言葉を向けてきた。

「大丈夫……汚くなんかないさ」

しかし、聞き入れるつもりなんかない。一言告げると共に秘裂に指を添えると、躊躇することなくこれを左右にクパッと開いた。

「あ……は……はああああ……」

ピンク色の柔肉が露わになる。ねつとりと濃厚な多量の愛液をまるで涎のように垂れ流す膣口が剥き出しとなった。ムワツとした少し蒸れたような香りに鼻腔びちうがくすぐられる。

「は……恥ずかしい……」

秘部を隠そうと手を伸ばしてくる。

けれどそれを許すつもりなどない。伸びてきた手首を掴み——

「恥ずかしがるようなことなんかなにもない。凄く……綺麗だぞ」

そう告げた。

綺麗という言葉に嘘はない。心の底からそう思えるほどに、実際伊織の花弁は美しい。

幾重にも重なった肉襞や、包皮に隠された陰核。呼吸するように蠢く膣口——それらすべてが妖艶で、魅力的だった。思わず見惚れてしまうほどに……。

千草に振られてから十年——その間、何度か同性の恋人を作ったことがあった。けれど、これほど美しい秘部を見たことはない。まるで初めて千草の秘所を見た時のように、花弁に惹き付けられる自分がいた。

「はあ……はあ……はあ……」

蠢くヒダヒダを見つめているだけで息が荒くなっていく。我慢なんかできない。止まることなんかできなかった。

本能の赴くままにしとどに蜜を分泌させる花卉へと唇を近づけていくと——

「んっちゅ……くちゅっ」

先程唇にキスをした時のように、秘部に口付けした。

「あっ！ くひんっ!!」

途端にこれまで以上に激しく伊織は肢体を震わせる。

それと同時に、まるで条件反射のようにドロツと多量の愛液が膣口から溢れ出てきた。この粘液を掬め捕るように舌を蠢かせる。

「はふうう！ な……舐めてる……。先生……茉莉子さんが……わ……わたしの……あっ
あつ……あそこ……を……舐めてるうう」

「んふうう……。凄くいい匂い。それに……。ちよつとしよつぱくて……。美味しい」

これを舐めたい。伊織の味を堪能したい——自然とそう思ってしまう。

「やだ……。言わないで……。駄目です。これは……。茉莉子さん……。は……。んつく……。く
ふうっ！ んっんっんんん……。はあ……。はあ……。はあ……。は……。恥ずかしい……。ですか
らあ……」

こちらを見つめながらそう訴えてくる。

が、言葉とは裏腹に伊織の表情は、もつと欲している。もつと気持ちよくして欲しい。感じさせて欲しい——などと訴えているように見えた。

こんな顔を向けられて止まることなんかできない。できるはずがなかった。

「最初にしてと言ってきたのは伊織だぞ。悪いが……。もう止まれない」

何を言われようが容赦なく愛撫を続ける。



れろっ……くっちゅ……ちゅれろっ……。れろっれろっ……。くちゅるるう……。

淫らに舌を蠢かせ、くねらせていく。襪の一枚一枚を舌尖でなぞり、時折勃起した陰核にも口付けをした。口唇を使って器用に包皮を剥くと、直接クリトリスに口付けをする。伸ばした舌で敏感部を転がすように刺激したりもした。

「あああ……す……ごい……あっあっ……。か……感じる……んっく……はふううっ！
それ……き……んっんっんんん！ き……もち……いい……。先生の舌……凄くいい……
ですううう……」

凄くいい——その言葉を証明するかのように、分泌されていた愛液が濃厚さを増している。半透明だった汁が白く濁り、糸を引くほど濃密なものに変わっていった。

「こんなの駄目……わたし……た……耐えられない……。気持ちよすぎて……あっあっ……へ……変に……へんになっちゃう……。お……かしく……なっちゃいます……」

舌の動きに合わせて肢体をくねらせながら、そんなことまで訴えてくる。

「いいぞ……。構わない。おかしくなつていいぞ。もつと……もつと感じてくれ。あたしで気持ちよくなつてる姿をもつと見せて！ んっちゅ……ちゅれろっ……れろっれろっ……んちゅれろおお！ ちゅっず……んじゅるるるう」

下品な音色が響いてしまうことも厭わない。

剥き出しの肉花弁に強く唇を押しつけると、頬を窄めてこれを啜った。伊織の愛液を吸引する。ゴクゴクという音を鳴らしながら、喉奥に女蜜を流し込んでいった。

もつと気持ちよくなる。華恋の手でもつと……もつともつと……。

ただでさえ気持ちいいのにこれ以上？

考えるだけで熱感がより増幅していく。身体中から汗が溢れ出し、ジンジンと下腹部が疼いた。思わずゴクツと息まで呑んでしまう。

なりたいたい。もつともつと気持ちよく……。華恋の手でより強い快感を刻んで欲しい。抑えがたいほどに本能が膨れ上がってくるのを感じた。

「な……りたいたい……。なりたいです。もつと……もつと気持ちよくなりたいたい。華恋さんの手で……感じ……たい……」

欲望を抑えることなどできない。

素直に自身が求めるものを口にした。

「ふふ、よく正直に言えましたね。それじゃあ……いきますよ」

華恋はニツコリと微笑みを向けてくれる。それと共にブレザーのボタンに手をかけると、躊躇なくこれを外し、下に着ていたブラウスまで容赦なく脱がせてきた。

白い肌が、ピンク色の下着が、大好きな人の前で剥き出しとなる。

「あああ……見ないで……恥ずかしいです……」

カアアアツと顔が一瞬で赤く染まっていくのを感じた。

思わず見ないでくれなどと訴えてしまう。が、華恋は目を逸らしてなどくれなかった。「恥ずかしがることなんかなにもありませんよ。凄く……可愛いです。とつても可愛い。

食べちゃいたいくらいに」

それどころか実に嬉しそうに呟くと共に、ゆっくりと下着に手をかけると、これさえも剥ぎ取ってくる。

プルンツと弾むように乳房が剥き出しとなった。

しっとりとした汗に塗れ、僅かに桃色に紅潮した乳房が……。痛々しいほどに乳首を勃起させた乳房が……。

「プルプルして……とつても綺麗」

「あう……あううう……」

向けられる視線に、投げかけられる言葉に、どうしようもないほどに羞恥が膨れ上がっていく。なんだか頭がクラクラした。

「恥ずかしそうですね。でも、これくらいで恥ずかしがってはいけませんよ早苗。本当に恥ずかしいのはここからなんですからね」

「本当に……恥ずかしい？ 何を……華恋さん……一体何をするんですか？」

「もちろん、こうするんですよ」

疑問には行動で答えてくれる。

露わになった張りのある乳房にゆっくりと顔を寄せてきたかと思うと、「んちゅつ」と躊躇なくキスをしてきた。

「はふんっ」

プニツとした唇の感触が胸に伝わってくる。それだけでビクンツと肢体が跳ねた。

「んふふ」

こちらが見せる反応に華恋は胸に口付けしたまま嬉しそうに微笑む——それと共に、更に乳房に対して口付けを行ってきた。

一回や二回ではない。

「んちゅっ！ くっちゅ……ちゅっちゅっちゅっ……ふちゅっ……むちゅうっ」

何度も何度も口付けの雨を降らせてくる。

「あんん！ あっあっ！ ふひんっ！ あっひ……くひいっ」

どうしてだろう？ 刺激としては採まれていた時の方が大きかったように感じるのだけれど、華恋にキスをされていると考えると、それだけで先程まで以上に感じてしまう自分がいた。

口付けのたびに身体をくねらせつつ、断続的に嬌声を漏らしてしまう。

「早苗は本当に敏感ですね」

「ああ……恥ずかしいです。恥ずかしいから……言わないで……」

「恥ずかしがる必要なんかありませんよ。だって……とつても嬉しいんですから。私で早苗が感じてくれていること……それが堪らなく嬉しいんです。だから、もつと、もつと感じて下さい。もつと気持ちよくなって。ほら……こんなのはどうですか？」

口付けだけじゃない。華恋は舌を伸ばすと、勃起した乳首を「んれるっ」と舐め上げて

きた。

「あひあああつ！」

途端にこれまで以上の性感に早苗は襲われる。全身を駆け抜けていったものは、一瞬目の前が真っ白に染まるほどの愉悦だった。

肉悦に表情が歪む。これまで以上の嬌声を漏らしてしまふ。

「んふふ……はっちゅ……。んれろっ……れろっれろっ……むっちゅ……ちゅぱっ……んじゅっ……むじゆるるるう」

そんな早苗の姿に嬉しそうな表情を浮かべながら、華恋は更に舌をくねらせ、乳頭を舐め上げてきた。しかも、ただ舐めるだけではなく、時には乳首を啜えたかと思うと、頬を窄めながら赤ちゃんのように乳首を吸るということまで……。

「あああ……それ……凄い！ あっひ！ んひいいい！ 凄いですっ!! あんっあんっあ
んんん！ か……んじる……はふ……んふううう！ はあっはあっ……わ……た
し……凄く……それ……お……おっばい……弄られて……す……ごく……かん……じ……
ちやっ……ます……」

愛撫によつて刻まれる。耐えることなんか不可能なほど大きな性感を……。

強すぎる快感。のたうつように肢体を震わせながら、早苗は気持ちいい、感じる——と、躊躇うことなく肉悦を口にした。

「もつと……ちゅっば……むちゅううっ……もつとですよ」

これに対して華恋は更に乳房に対する愛撫を激しいものに変えてくる。

ただ乳頭を咥えて吸ってやるだけじゃない。

舌を伸ばし、乳輪をなぞるように蠢かせてきた。その上で乳首を転がすように刺激してくる。同時に手で空いた左胸を揉みしだくという行為までしてきた。

乳房が捏ねくり回される。さらに揉むだけではなく、時には指で乳首を摘み、引っ張ったり転がしたり、押し込んだり——などという愛撫まで……。

「す……ごい！ あっあっあっ！ これ……凄い！ す……ごすぎ……ます……。気持ち……んつく……はふううう……はあっはあっはあっ……いい……。とつても……いい。いいです……」

蠢く舌で乳首を舐められながら掌で乳房を揉まれるたび、強すぎる性感が全身を駆け巡っていく。チカッチカッチカッと視界が幾たびも明滅するほどに、刻まれる愉悅は強烈なものだった。

「華恋さん……あああ……華恋さん！ いいです。感じます」

燃え上がりそうなほどに全身が熱くなっていく。身体中から汗が溢れ出す。噎せ返りするようなほど濃厚な匂いを含んだ汗が……。

同時に下半身が疼く。これまで以上にキュンキュンと……。

「でも……もつと……あああ……もつと……」

気持ちがいいのに下半身はもどかしい。

思わずこつちにも愛撫をして欲しい——とでも訴えるかのように、腰を前後に振ってしまおう自分さえいた。

「むつちゅ……れろつちゅ……んふううっ……はあつはあつはあつ……分かっていきますよ。こつちも……ちゃんと気持ちよくしてあげますね」

唾液に塗れた乳首から一旦唇を離すと共に、華恋はそう口にし——
「ふっひっ！ あひんんっ」

こちらのスカートを捲り上げると、ブラと同じくピンク色のショーツを横にずらし、愛液に塗れた肉花弁に指を添えてきた。

ぐちゅうう……。

湿り気を帯びた淫靡な音色が周囲に響く。

「あああ……はっひ……んひんんっ」

まだ触れられただけでしかない。だというのに、全身がガクガクと震えてしまう。ジュワアアッと膣口から更に多量の愛液を分泌させてしまう自分さえいた。

「早苗のエッチなお汁が指に絡んできます」

「言わないで……そんなはずかしいこと……口に……し……しないです……」

「でも、本当のことですよ。ほら……いいんでしょ？ こんな風にグチュグチュされるのが……」

もちろん指を添えてくるだけで終わりではない。

ぐつちゅ……ぬちゅうつ……。ぐつちゅぐつちゅぐつちゅ……。

幾重にも重なるヒダヒダの一枚一枚をなぞるように華恋は指をくねらせてくる。秘裂を上下に擦り上げ、陰核を転がすように刺激してきた。

その愛撫に合わせて淫靡な音色が響く。グツチュグツチュと……。

「あああ……駄目……こんなの……よすぎて……んっひ！ はひいいい！ 感じすぎて……私……な……にも……あつあつあつ……なにも考えられなくなる……。私……本当になにも……んんん！ な……にもおおお♥」

全身が熱に浮かされていようだった。思考が滅茶苦茶になつていく。言葉通りなにも考えられなくなっていく。気持ちよくなりたい。もつと華恋の手で感じたい——頭の中はそれ一色に染まっていった。

本能のままに、指の動きにシンクロさせるように腰を振るなどという行為まで……。

指に強く秘部を押しつけるその様は、もらって欲しい。自分の全部を——などと訴えているようですらあった。

「……早苗」

こちらが本能的に求めていることを悟ったのだろうか？ 何かを訴えるような視線を華恋が向けてくる。

彼女が言いたいことをすぐに早苗は理解した。理解できた。

何故ならば、それは自分自身も求めていることだったから……。

「いいですよ……。お願いします。もらって下さい……。私の全部を……。そして……。その……感じさせて……。華恋さんを……。私の奥で……」

だから頷く。挿入を求めた。

「分かりました……。早苗……。いきますね」

これに華恋は応じてくれる。

どこか顔を上気させながら頷くと共に、再び早苗の唇に自身の唇を重ねてきた。

「んっちゅ……。むちゅっ……。ふじゅううっ」

当然ただ唇と唇を重ねてくるだけではない。口腔に舌を挿し込んでくる。

早苗は抵抗することなくこれを受け入れた。

挿し込まれた舌に自分からも舌を絡み付かせていく。

ぐっちゅ……。ぬちゅるっ……。ちゅっぶ……。ぐちゅっぐちゅっ……。ぬじゅるるう……。

重なり合った唇と唇が、イヤらしい水音を奏でた。

それと共に――

つぶうううっ……。

「むっふ！ んふうううっ!!」

挿入が始まる。

（は……。挿入って……。挿入ってくる……。膣中に……。私の膣中に華恋さんの指が……。あ

ああ……。くる……。ズブズブって……。奥まで……。く……。るううう）

華恋の指が肉壺に突き入れられた。

下腹部に異物感が広がっていく。身体を内側から押し広げられるような感覚だった。挿入いれられたのはあくまでも指一本でしかない。

「もっふ……んふうう！ もっもっ——もふううう……」

だというのに、息苦しささえ感じるほどの圧迫感を覚えてしまう。挿入に合わせてビクッビクッビクッといく度も震えた。

けれども辛くはない。息苦しいのに、身体を無理矢理押し開かれていくような感覚なのに、どうしてだろう？ 抜いてくれと思うことはなかった。

それどころかもっと奥まで挿入れて欲しい——とさえ思ってしまう。

その想いを華恋に伝えるように、更に激しくキスをした。舌を蠢かせ、大好きな人の口腔を貪る。

このお陰だろうか？ 華恋は指を止めることなく、より奥にまで挿入してくれた。

プチプチプチッと早苗の純潔を奪うほど奥にまで……。

「はっぎ……んぎいっ」

身体が引き裂かれるような痛みが走る。思わず悲鳴をあげてしまう自分がいた。膣口からは破瓜の血が流れ落ちていく。それと共に臍からは涙まで……。

「あ……ご……ごめんなさい……」

この涙に華恋が驚くような表情を浮かべた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!